



Special Features / Engineering's Heritage VI The origin of Japan's civil engineering culture

# 琉球王国時代に造られた石畳「金城の石畳道」

## 沖縄県那覇市

特集  
土木遺産VI  
日本の土木風土の原点



株式会社片平エンジニアリング/総務・契約部  
佐藤 尚  
SATO Takashi

### 1—「真珠道」という道

沖縄県那覇市金城地区にある石畳道は、戦災から逃れて、琉球王国時代から現存する道である。両脇には赤瓦の屋根や石垣など昔からの面影が残る人気の観光スポットであり、沖縄県指定記念物として大切に保存されている。琉球王国時代には、首里城付近や首里城を基点として数多くの石畳道や石橋が存在したと言われている。

琉球王国時代、首里城と間切（現在の市町村）を結ぶ主要街道として、宿道と呼ばれた道幅2.4m（8尺）以上の道があった。その一つが、首里城を起点とし、南西約3.5kmにある国場川を渡る真玉橋を経由して那覇港南岸の住吉町までを結ぶ延長約8kmの「真珠道」である。

真珠道は第2次世界大戦や戦後の道路整備によりほとんどが破壊された。しかし金城にある約300mの石畳道は、約500年前から現存している道である。石畳道の幅は3.0～5.3mあり、宿道の定義からするとかなり広い幅を持つ道で、当時は大道と呼ばれていた。

真珠道は、首里城南側の上間や識名地区を通る唯一

の道であったため人馬の往来は多く、石畳道の中間地点ではユサンディマチ（夕方の小市場）が開設され賑わっていた。金城地区では、横道も石畳で整備されていたようである。

当時の日本では参道の一部にしか用いられてなかった石畳道を、なぜ琉球王国は主要街道を石畳にしたのだろうか。



■図1—真珠道のルート（地図出典：国土地理院）



■写真1—首里城の守礼門



■写真2—赤瓦と石垣

### 2—琉球王国

正式国名を琉球國と言う。1429年に尚巴志王が琉球を統一して成立し、近隣の中国・日本・朝鮮・東南アジア諸国との交易によって栄えた国である。しかし統一当初は、各間切の権力者である按司達の勢力が強く内乱が絶えなかった。1477年、13歳で即位した尚真王は国内を平定し、中央集権化を図り、外交・貿易を活発に進めていった。1571年には、奄美諸島北部を侵略制圧し、王国の版図が最大となった。その後16代まで王制が続いたが、薩摩藩の侵略により徳川幕府体制の管理下となる。1871年、明治政府により琉球藩とされ、1879年に沖縄県となった。

真珠道は1522年、尚真王によって建造された。ただし、完成したのは首里城の守礼門から真玉橋までであった。1526年に尚真王が没した後、子の尚清王に引き継がれ、1553年までには那覇港南岸に通じたのである。

尚真王が真珠道を造った翌年には、国の統一持続のために各間切の按司を首里城下に移住させ、代理の按司を派遣した。按司を移住させた地区の一つが金城地区と言われている。金城地区は、湯水に悩まされていた地区が多い中で、湧水が

豊富であった。「ガー」と呼ばれる共同井戸が、金城地区の石畳道付近に4箇所確認されており、最大規模となる「金城大樋川」は現在でも水が湧き出ている。首里城に近く、湯水に悩まされることないこの地は、按司や王に仕えた人々が住むには最適な場所であったと考えられる。上級階級のみならず許された石垣が築かれ、沖縄特有の伝統的な風景が造られている。

### 3—金城の石畳道

金城の石畳道は首里台地の南斜面に位置し、平均傾斜度が21.5%あり、部分的に階段構造となっている。この石畳道は20～50cmの大きさの琉球石灰岩が敷き詰められている。琉球石灰岩は南西諸島に広く分布する石灰岩で、更新世にサンゴ礁のはたらきで形成され、多くの気孔を含んでいて地下水を浸透させる性質を持っている。石畳道の目地には砂を使用している。また敷石は表面を小叩きにして、滑らないように工夫されている。道脇には排水溝が両側もしくは片側に設置されている。

現地を歩くと、坂道は緩やかなカーブを持ち、石垣に囲まれた沖縄特有の赤瓦の家を見ることが出来る。また、雨に濡れた琉球石灰岩の石畳にはより一層の美しさがある。



■写真3—排水溝と階段

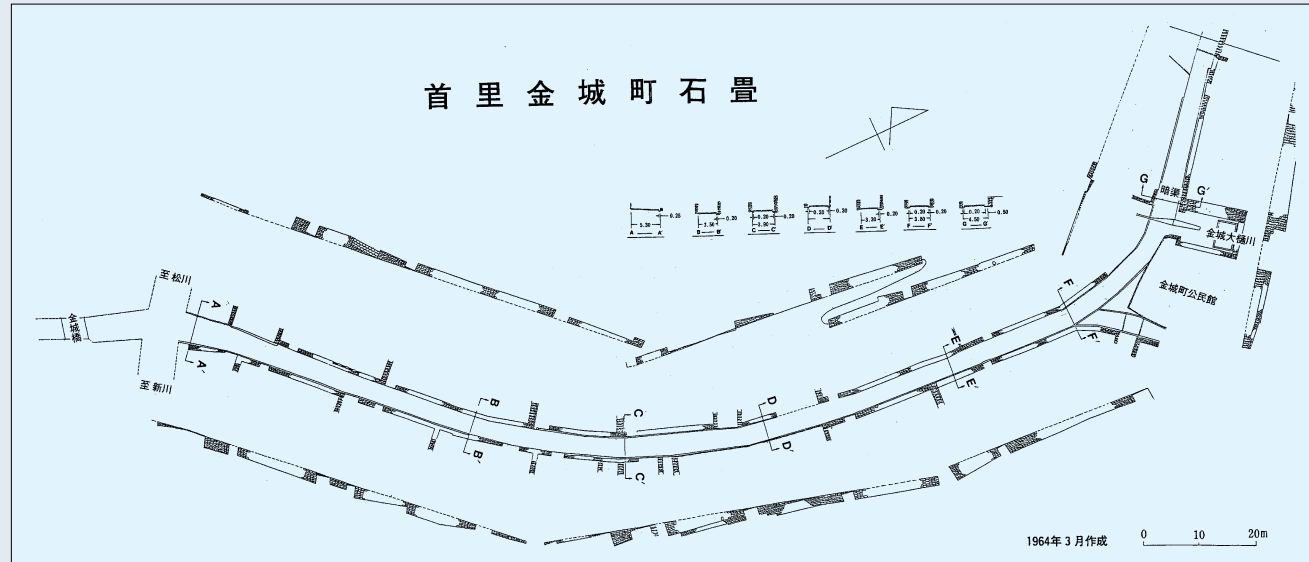


■写真4—共同井戸である金城大樋川



■写真5—石敢當





■図2—金城の石畳道概要



■写真6—金城石畳道と案内板



■写真7—首里城正殿

金城の石畳道に繋がる道の交差点においては四差路になっている所がない。四差路になる場所においても、微妙にずらして全て三差路にしている。その突き当たりには「石敢當」の石札が置かれている。これは中国の大勇力士の人名に由来した魔除けとしての役割の他に、道の突き当たりを意味し、石垣に囲まれた道の交差点は見通しが悪い場合、出会いがしらの事故を防ぐためでもある。また、沖縄の土木技術を語る上でグスク(城壁)の石積みや先島諸島を含め、200～300のグスクがあったと言われている。琉球石灰岩を用いて築かれたグスクの石積み技術には野面積み、布積み、あいかた積みがある。石畳道の建設当時の記録や文献はないが、石積み技術は石畳道にも活かされたことであろう。

#### 4—明治時代の石畳道工事記録

1906年(明治39年)から翌年にかけて行われた勾配のある石畳道の改修工事の記録によれば、幅員約2m、全長約500mの石畳道の工事に携わった人々は、子供からお年寄りまでの150名ほどのスンジューと呼ばれた

無償で従事する人々であった。まだ機械がないため、琉球王国時代とあまり変わらない施工手法であったと思われる。スンジューは材料の石を収集する班、収集した石を運搬する班、石敷作業を行う班、石敷道の周辺を芝生で固める班の4つに分けられた。

石敷作業は、石工あるいは先輩格が担当した。まず整地した斜面に石敷のコースを設定した。幅員は目算で決められ定規等を使うことはなかった。4～5名を1組に、同時に数箇所から開始され、最初に比較的大型の石を利用して両端の淵石を敷いた。淵石は転石を防止するためにその半分の深さまで埋められた。列車のレール状に淵石を敷設した後、その中間にもう一つ石列を敷いた。これは両方の淵石よりも僅かに高くし、中央部を盛り上げることで、雨水を左右に流すためである。3本の石列の間には比較的平坦な面を上面にして、斜面の下側から石を敷き詰めた。この工事は、野良仕事の合間に行うものであったため、完成までに6ヶ月余りを費やした。

#### 5—石畳の舗装路

沖縄本島南部の主要街道としての役割の他に、真珠道は那覇港を防御する目的があったとされている。当時



■写真8—城壁に囲まれた首里城



■写真9—復元された島添坂石畳



■写真10—識名園

の那覇港は宮城県の松島地区のような、海に島々が点在する地形であった。1451年、尚金福王が那覇港北岸に、長虹堤を造った。これは島々を結んだ道で浮道とも呼ばれた海中道路である。しかし那覇港南岸には、まだ道がなかった。以前より海賊などに警戒する必要性があり、尚真王の時代になって、那覇港南岸地区の道の整備は重要なものとして位置付けられた。

那覇港北岸の浮道には三重グスクという砲台が築かれていた。そして1553年、尚清王は那覇港南岸の真珠道に、屋良座森グスクという砲台を造った。この両側の砲台は、1609年に薩摩藩の軍勢が那覇港から上陸しようとした際に、激しい砲撃を浴びせた。そのため薩摩藩は予定を変更し、今帰仁村と読谷村から上陸して首里城へ攻め入った。

また、琉球王国時代、中国から来た冊封使は400～500人が約半年間滞在したと言われている。その歓迎は大規模なものであった。催しは崇元寺、首里城、龍潭、識名園などの城の内外で行われた。そして首里城から識名園に向かった冊封使は、金城の石畳道を通ったとされている。この石畳道は冊封使の歓迎においても、その役割を果たしてきた。

さらに、当時の碑文によると「王が按司・下司・民百姓のため雨降る時は泥土が深くなる道に石をはめさせた」と記している。また、真珠道と真玉橋の落成式について「1522年4月9日最高神女の聞得大君をはじめ、すべての神女が集まり神託を賜った。すべての上下の軍人が礼



■写真11—ヒジガーピラマール散策路から眺めた那覇市内

拝し国の按司のため、王の政治のため祈った。また神女だけではなく三百人の僧達もきて祈り祝った」と記している。当時の尚真王を中心に国を挙げての落成式であったことは、いかに金城の石畳道を含む真珠道が軍用道路として、また按司を移住させ国の統一のため重要だったのかがうかがえる。

#### 6—道普請として培われてきた道

金城の石畳道は、この地域の繁栄とともに人々のコミュニティの場でもあった。当時から地元住民達において掃き掃除などがされ、道普請による修繕活動があった。今も沖縄において、石畳道は琉球王国の歴史の証として親しまれ、金城地区以外の場所でも石畳を復活させる道づくり活動が進んでいる。首里城と金城の石畳道の間に位置する島添坂には石畳道が復元されている。

島添坂と金城の石畳道は真珠道として道の百選に選ばれており、琉球王国時代の空間を醸し出している。また、真珠道とは別に、首里城から識名園までのもう一つの道として「ヒジガーピラマール散策路」が整備されている。

#### 7—琉球王国を偲ばせる道

金城の石畳道は、近年まで往来が盛んで主要街道としての役割を果たしてきた。それは、ここで生活してきた人々の道普請という奉仕活動によって維持されてきた証でもある。それ故に、今も存在し利用されている道なのである。今後も琉球王国を偲ばせる道として、人々に愛し続けられることを願ってやまない。

#### <参考文献>

- 1)「沖縄県歴史の道調査報告書1」沖縄県 昭和59年3月
- 2)「首里城跡周辺整備基本構想調査報告書」那覇市 昭和54年5月
- 3)「石畳坂石敷道 沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(4)」沖縄県 1986年3月

#### <取材協力>

琉球大学名誉教授・工学博士 上間清

(写真提供:P8上、写真8、荒井裕則

写真1、3、4、6、7、9、10、塚本敏行

写真2、5、11、筆者)

図1、2:参考文献1より